

第二部

災害復興支援活動報告

1. 災害復興支援ボランティア委員会の設置経緯

本学では、2011年3月に発生した東日本大震災（以下、「震災」という。）の復興支援活動として、震災直後の6月より、被災地までボランティアバスを運行するなど積極的に取り組んできました。この復興支援活動は、10年間を目途に取り組みを続けてきましたが、2021年3月に震災発災から10年が経過することから、これら復興支援活動の検討を担ってきた「東日本大震災等復興支援プロジェクト」はその役割を終えることになりました。

しかし震災以降、全国各地では毎年のように豪雨や地震などの自然災害が頻発しており、そのたびに、地域住民の生活や尊い人命が奪われるといった甚大な被害をもたらしています。そして、今後も豪雨や南海トラフ地震をはじめとする自然災害発生の可能性が高まっているとの警鐘が鳴らされています。

このような状況に鑑みて、本学として災害復興支援に係るボランティア活動の内容や実施を検討する体制整備の必要性を確認し、「災害復興支援ボランティア委員会」の設置を提案し、承認されました。

ここでは、「東日本大震災等復興支援プロジェクト」から役割を引き継いだ「災害復興支援ボランティア委員会」の設置された経緯などの概要を報告します。

東日本大震災等復興支援プロジェクトを総括

震災の復興支援への対応については、危機対策本部（2011年3月14日設置）で、様々な対策及び措置が検討され、本学として復興支援活動を迅速かつ総合的に展開するため、また全学的な組織体で検討することが望ましいとの判断から、危機対策本部会議の下に「学生ボランティア等の被災者・被災地支援活動検討プロジェクトチーム」（2011年4月）が設置されました。

危機対策本部は、2012年4月18日をもって解散しましたが、長期的な支援活動が必要との判断から、名称を「東日本大震災復興支援プロジェクト」に変更し、学長会の下に移管され、ボランティア・NPO活動センターがその事務局になり、継続して復興支援に取り組んできました。

その後、他の地域での災害にも対応できるように名称を「東日本大震災等復興支援プロジェクト」に変更（2016年6月1日開催の学長会）されたのちも復興支援に取り組み、震災発災から10年が経過した2021年3月末をもってその役目を終えました。

このプロジェクトについては、2021年度第9回部局長会（2021年6月3日開催）において、震災以外の被災地での活動を含む災害復興支援ボランティア活動の実施実績、報告会やフォーラムの開催実績、活動費の収支報告などの総括を行いました。

災害復興支援ボランティア委員会の設置

震災発災後の10年間は、毎年のように全国各地で自然災害が発生し、これら災害の被災地では、復興支援のためのボランティアが重要な役割を果たしてきました。

国内では、気候変動等による豪雨や南海トラフ地震をはじめとする自然災害発生の可能性が高まっていると指摘されており、防災・減災の取組や発災後のボランティア活動への関心が増えています。

一方本学では、2021年3月末をもって東日本大震災等復興支援プロジェクトがその役割を終えたため、これまでのように自然災害発生時に対応した復興支援ボランティア活動を検討する体制がない状況になりました。

このような状況に鑑み、本学として災害発生時に迅速かつ円滑に復興支援のボランティア活動について検討するための委員会設置について、2021年度第9回部局長会（2021年6月3日開催）の議を経て、2021年度第3回評議会（2021年6月17日開催）において審議され、「災害復興支援ボランティア委員会」の設置が承認されました。

災害復興支援ボランティア委員会の概要

【目的と審議事項等】

災害復興支援ボランティア委員会は、自然災害等

が発生したとき、大学として迅速かつ円滑に復興支援に係るボランティア活動が遂行できるよう、次の事項について審議することを目的としています。

- (1) 復興支援に係るボランティア活動の実施の有無に関する事項
- (2) 復興支援に係るボランティア活動の内容とその範囲に関する事項
- (3) 復興支援に係るボランティア活動に要する経費等に関する事項
- (4) その他復興支援に係るボランティア活動に必要な事項

【構成員等】

この委員会は、次のメンバーをもって構成します。

- (1) 学長が指名する副学長 1名
- (2) 学長が指名する学部長 若干名
- (3) 学生部長
- (4) ボランティア・NPO 活動センター長
- (5) ボランティア・NPO 活動センター副センター長
- (6) ボランティア・NPO 活動センター事務部長
- (7) 学長が指名する学内の学識経験者 若干名

【予算】

予算は、「東日本大震災復興支援ボランティア活動費」に計上された予算をそのまま「災害復興支援ボランティア活動費」（名称変更）として引き継ぎしました。

【事務局】

本件に関する事務局は、ボランティア・NPO 活動センター事務局になり、自然災害等の発災に伴う被災状況等について、必要に応じて現地を訪問するなどして情報収集を行い、災害復興支援ボランティア委員会に情報提供を行います。また、復興支援活動を行うにあたり、被災地との連絡調整などの役割を担います。

2021年度委員（学長指名委員）

2021年度の災害復興支援ボランティア委員会委員のうち学長が指名する委員について、学長に内申（2021年6月17日付文書）し、2021年度第12回学長会（2021年6月23日開催）で承認後、第12回部局長会（2021年6月24日開催）において、次のとおり報告されました。

- ・学長が指名する副学長
：安藤 徹 副学長
- ・学長が指名する学部長
：長谷川 岳史 経営学部長
：本多 滝夫 法学部長

- ・学長が指名する学識経験者
：長上 深雪 社会学部教授

2021年度の主な議案等

◆第1回委員会（2021年7月15日開催）

【報告事項】

- ・東日本大震災等復興支援プロジェクトにおける活動の総括を報告
- ・災害復興支援ボランティア委員会の設置経緯を報告

【審議事項】

- ①東日本大震災被災地とつなぐオンラインプログラムの実施について、企画を提案（承認）
- ・災害発生時などの対応について、発災時には、災害ボランティアセンター等からの情報をもとに、正副委員長で協議し委員会を招集することを提案（承認）

【意見交換】

- ・2021（令和3）年7月1日からの大雨（全国1都16県）の被害状況を共有し、意見交換

◆第2回委員会（2022年3月30日開催）

【報告事項】

- ・東日本大震災被災地とつなぐオンラインプログラムの開催報告

【審議事項】

- ・2022年度の東日本大震災被災地における復興支援ボランティア活動について、企画概要を提案（承認）
- ・「災害発生時の本学（深草）及び周辺の被災者支援ボランティア活動」のあり方を検討開始することを提案（承認）

【意見交換】

- ・2021（令和3）年7月1日からの大雨（全国1都16県）の被害状況等について、情報を共有

最後に

北川秀樹先生（ボランティア・NPO 活動センター副センター長／政策学部教授）、長上深雪先生（学長が指名する学識経験者／社会学部教授）には、2021年度がご退職される最終年度でご多用にもかかわらず、当委員会委員としてご支援とご指導をいただき、ありがとうございました。

〈報告者：吉貞 正流〉

事業名	～希望のつくりかた～ 東日本大震災から10年 東日本大震災から学ぶ
実施日	●2021年9月11日(土) 12:40～15:30 「震災を学ぶ編 ～震災を“学ぶ”ことは“生きる”を知ること」 ●2021年9月17日(金) 13:00～16:40 「未来を紡ぐ編 ～雄勝町で生まれた新しい故郷のカタチ」
場所	オンライン (Zoom ミーティング)
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	18名

1. 経緯・目的

災害は誰にとっても「恐怖」です。できれば、考えたくないことかもしれません。しかし、自分自身にいつ降りかかって来てもおかしくないのが現実です。

そこで、今回の講座では、「災害直後のこと」ばかりではなく「もう少し長いその後」に注目し、起こってしまった出来事に悲嘆するだけでなく、もう一度希望をつくるために震災を経験した講師たちがどのような歩みをしてきたのかについてお話を聞き、災害、街づくりについて考えるきっかけを作りたいと考えました。

そこで、東日本大震災について改めて向き合うため「震災について学ぶ編」を実施し、震災後の動きについて学ぶために「未来を学ぶ編」の2部構成で本講座を開催しました。



2. 概要

(1) 【1日目】●震災を学ぶ編

～震災を“学ぶ”ことは“生きる”を知ること

講師：藤間 千尋氏 (一般社団法人3.11みらいサポート)

鈴木 典行氏 (大川伝承の会 共同代表)

- ①藤間氏とオンラインでつなぎ、東日本大震災による石巻市の被害についてお話。
- ②鈴木氏が大川小学校を歩きながら、震災前の大川小学校の様子や、災害時の様子、その後どのような想いで語り部活動を始めたのかなどにつ

いてお話。

③質疑応答の時間

- ・「発災後から現在の意識の変化」
- ・「ストレスコントロールをどう行っているのか」
- ・「防災を考えるうえで必要なこと」など、多様な質問

- ④休憩を挟んで、3人一組のブレイクアウトセッションで感想を語りあった後、全員で出た意見を共有。

(2) 【2日目】●未来を紡ぐ編

～雄勝町で生まれた新しい故郷のカタチ

講師：徳水 利枝氏 (一般社団法人雄勝花物語 代表理事)

鈴木 拓也氏 (ウズマキ眼鏡珈琲店店主)

阿部 久良氏 (雄勝町渚泊推進協議会代表)

- ①竹田コーディネーターより、本学のこれまでの東日本大震災への取り組みと、雄勝町についての説明。
- ②インタビュー形式で、徳水氏に雄勝ローズファクトリーガーデンの出来た経緯や、ガーデンへの想いなどをお聞きし、その中で出てきた「通いながらつくる故郷」をキーワードに限界集落の新しい可能性などについて聞きました。

③質疑応答

- ・つながりから見えてきたことは?
- ・これからどのようにしていきたいという希望があるのか
- ・ボランティアを受け入れる時に気を付けていることは? 等

- ④雄勝町出身ではない鈴木氏と雄勝町出身の阿部氏の取り組みを始めたきっかけ、現在の取り組み、そこに至るまでの心境の変化、雄勝町に対する熱い想いなどについて、こちらもインタビュー形式で聞きました。

⑤質疑応答

- ・お二人とも新しいことに挑戦していますが、あき

らめそうになった時に頑張れた原動力を教えてください

- ・お二人のこれからの計画について
 - ・雄勝町の魅力はどんなところか 等
- ⑥ 1日目とは違う、3人一組になってブレイクアウトセッションを行い、感想を語りあった後、全員で出た意見を共有。



3. 参加者の声・得られた効果など

- ・鈴木典行さんが何度も仰っていた「死んじゃってダメなんです。」という言葉がとても印象に残りました。「何かが起こる可能性があるから・・・」ということ、今を生きる私達は、徹底して考えなければいけないと思いました。
- ・今まで海から来るイメージしかなかった津波が、川をつたって来ること、建物や物が引き波で流されるだけでなく、川からの津波と海からの津波からできる渦で押し潰されること、津波の被害が想像以上に広範囲であったことがとても衝撃的でした。
- ・今回のお話を聞いて、今まで自分の中になかった新しい観点がたくさん見つかりました。その中でも特に印象に残った言葉が、徳水さんの「通いながらのふるさと」という言葉でした。私は10歳まで転勤で様々な所に住んでいたからか、今住んでいるところにも愛着があまりなく、ふるさとや地元という言葉が昔から住んでいる人のための言葉のように思えて、身近に感じる事が出来な

かったので、とても救われた気持ちになりました。

- ・今回の2日目の講座を受けて、自身で行動する事の重要性を理解しました。お話して下さった方の中には、最初はまちづくりに興味が無かったとおっしゃっていた方もいました。しかし、人と関わり行動する中で、心の変化が起き、さらに、実際に行動に移されていました。考えるまでは出来ても、行動に移すことは少しハードルが高いと思います。だから、本当にすごいと感じました。

4. コーディネーター所感

コロナ禍でいろいろなことが今まで通りにはいなくなり、いろいろなことが中止になる中、本学で続けてきた東日本大震災復興支援ボランティアの活動も中止にせざるを得ない状況になりました。

学校に来ることもままならない状況の中では仕方ないことだとは言うものの、「仕方ない」で終わらせてはいけません。今こそ、何かアクションを起こさないといけないと考えました。あの震災を経験し、たくさんの苦難を経験しながらも立ち上がり、行動している方々が、「何を思い」「考え」「実行してきたのか」という歩みを震災の観点からだけではなく、これからの生きていくすべとして学ぶことがあるのではないかと考え本講座を企画しました。

「希望のつくりかた」というタイトルには、「今こそ、希望を語り、未来を紡ぐために発想を豊かにしよう」という願いを込めました。

この2回の講座の中で出会った5名の皆さんのお話は、五者五様で、参加した学生の学びは非常に大きかったようです。現在の自分自身の課題や研究していることと結びつけ、限られた時間の中でしたが、たくさんの質問が出ていました。参加した学生たちにとっては、大きな学びと刺激になった時間だったと感じています。

〈報告者：竹田 純子

(深草キャンパスコーディネーター)〉